

赤松月船の後進育成

—黄瀛、木山捷平、太宰治、藤原審爾を育てる—

定金 恒次

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2006年10月4日受理)

1 はじめに

慧僧とあがめられ、詩人とたたえられた赤松月船は、1897（明治20）年岡山県浅口郡鴨方村（現浅口市鴨方町）に生まれ、百歳の天寿を全うして、1997（平成9）年8月5日没した。明治、大正、昭和、平成と4代、1世紀にわたる長い生涯において多彩な才能を存分に発揮し、宗門の発展に、詩壇の興隆に、はたまた地域文化の振興に輝かしい足跡を残した。その功績は次の7つに集約される。

第1は曹洞宗人としての業績である。月船は幼少にして宗門に入ったのち、専門道場瑞応寺（愛媛県）、大本山永平寺（福井県）で修行、岡山県の観音寺、楳林寺、洞松寺、善福寺等の住職を務められた。大本山より特命布教師を拝命、また1等教師、正教師、権大教師、黄恩衣特許、大教師と栄進を重ね、1985（昭和60）年には権大教正という要職に補任された。法齢実に88歳に達する長きにわたって宗門の布教、教化活動に献身した。

第2は詩人としての功績である。1920（大正9）年、生田長江に師事して本格的に詩才を磨き、詩誌「月光」同人として佐藤春夫、高村光太郎、室生犀星らと親交を深めながら詩作に精励。また自らも同人詩誌「朝」（のち「汎濫」と改題）を主宰して、佐藤八郎、大木篤夫、吉田一穂らと活躍するとともに、「詩聖」「新興詩人選集」などの詩誌の選者や編者も務めた。さらには自らの詩集『秋冷』『花粉の日』『明るきセレナード』『赤松月船全詩集』や詩論『新しい詩の作法』などを出版し、詩壇の興隆に寄与した。

第3は詠讃歌作詞者として活躍し、洞門発展に貢献したことである。1951（昭和26）年、梅花流詠讃歌創立に際して準備委員を務めて以来、梅花流詠讃歌専門委員、同名誉師範として尽力。「原爆犠牲者慰霊和讃」「沖繩英霊追善御和讃」「ハワイ開教70周年奉讃和讃」等々、数多くの御和讃、御詠歌を作詞し、詠讃歌作詞の第1人者として君臨した。

第4は仏教理論家としての活動である。新聞、雑誌、放送などを通して経典の解説や評論を述べるほか、『大蔵經抄話』『禪十二講』『禪の四十二話』『緑蔭に坐わる』などの解説理論書を出版して啓蒙活動に力を尽くした。

第5は児童文学の振興に力を尽くしたことである。戦後の荒廃期、青少年の健全育成のための方策としてすぐれた読み物を読ませることの必要性を訴え、『仏教童話全集』の出版を提唱。その出版事業に参画するとともに、文壇での幅広い人脈を生かして執筆者の発

掘に努め、武者小路実篤、中河与一、尾崎士郎らの著名作家や小川未明、浜田広介、坪田譲治などの一流童話作家の獲得に成功した。また、自らも数多くの格調高い仏教童話を執筆し、『仏教童話全集』全12巻（大法輪閣刊）刊行の立て役者として活躍した。

第6は行政マンとしての業績である。戦時中、村民から囑望されて岡山県川上郡平川村の助役、村長を務めたほか、森林組合長、産業組合長なども兼務。また戦後は同郡備中町の公民館長、教育委員長として地方行政、教育行政に卓抜の手腕を発揮した。

第7は後進の育成に力を注いだことである。以下、小論はこの点に焦点をあてて論述し、その業績を明らかにしようとするものである。

2 中国の詩人黄瀛を育てる

月船は1923（大正12）年、大藤治郎が編集する詩誌「詩聖」の選者を委嘱される。当時「詩聖」は詩書の専門出版社であった第一書房が発行、日本国内だけでなく、広く海外からも投稿詩が寄せられていた。

この年、中国の中学生から「早春登校」と題する詩が寄せられた。洗練された日本語もさることながら、軽快でみずみずしい詩に月船は心を奪われた。早速選に入れ、同誌1923年3月号に掲載する。「早春登校」を寄せた人は、黄瀛という青島日本中学校の生徒であった。

黄瀛は1906（明治39）年10月6日、中国人を父（師範学校長）、日本人を母（お茶の水女高師卒・太田喜智）として四川省重慶に生まれた。幼くして父を失った黄瀛は、母、妹（寧馨）と共に中国各地に転住したのち、1913（大正2）年、母の出身地千葉県八日市場へ移住した。翌年同地の尋常高等小学校に入学、6年生のころから詩を作り始めた。1919（大正8）年、千葉県立成東中学校に進学しようとしたが中国籍であったため不許可となり、東京の私立正則中学校に入学する。しかし関東大震災が起これ、この中学校が授業を停止したため。1923（大正12）年、青島日本中学校に編入した（この時、家族は天津に移住していた）のであった。黄瀛が「詩聖」に投稿したのは、同中学校4年生のときであった。

ちなみに、このとき中国・広州の嶺南大学への留学生であった草野心平も現地から投稿、月船選の「無題（そこらここら）」が黄瀛の「早春登校」とともに「詩聖」（1923年3月号）に掲載される。これが機縁となって、後年両者はほぼ時を同じくして月船主宰の「朝」同人となり、生涯詩友として親交を続けるのである。

黄瀛の詩才を認めるとともに、その数奇な身の上も知った月船は、青島にいる彼に何くれと目をかけ、日本詩壇の動向や同人詩誌の情報などを知らせた。当時、日本を代表する詩誌として、新潮社が発行する「日本詩人」（1921年10月創刊）があった。これは「詩話会」の月刊機関誌として出されたもので、いわば詩人への登龍門的存在であった。月船は黄瀛に、同誌が懸賞詩を募集していることを知らせ、応募を勧めた。黄瀛は早速「朝の展望」と題する詩を応募する。ところが、これが260余編の応募作品の中から第1席に選ばれ、

第1回詩話会賞を獲得したのである。黄瀛は賞金20円を贈られるとともに、一躍日本詩壇の寵児となる。その詩は、1925（大正14）年2月、「第二新詩人号」と銘打って同誌の巻頭を飾った。その詩を掲げる。

朝の展望

見給へ

砲台の上の空がかつきり晴れて

この日曜の朝のいのりの鐘に

幾人も幾人も

ミツシヨンスクールの生徒が列をなして坂を上る

冬のはじめとは云い乍ら

胡藤の疎林に朝鮮鳥が飛びまはり

町の保安隊が一人二人

ねぎと徳利と包とをぶらさげて

丸い姿で胡藤の梢にかくれたり見えたり

あゝ朝は実に気もちがいゝ

窓をふいてると

暖い風が入りこみ部屋をぐるぐるまわる

そしてあゝ

日曜の朝はいつにない陽の流れ

いつにない部屋の静けさ

この二階の室で海から山から

僕は伊太利のやうなこの町の姿をも見ようとするのだ

寄宿舎で一番見晴らしのよいこの部屋からは

はげ山の督辦公館も見え

その上にまた

信号所のがつしりした建物が見えて

このあさみどりの空に

数葉の旗がはたはたとなびき

ゆふべー晩沖に伏えてた帆前船が

しづしづと

しづしづと港へ入るではないか

あゝ黒い保安隊の兵舎からは

すてきにゆるやかなラッパの音

海面一帯朝の光りに輝いて

軍艦海坂の黒煙りよ

それからまた遠い向かふ岸の白壁の民家よ
窓をふきながら
春のやうな気分もて
こゝろしづかにも
日曜の朝の展望をするのだ

学校の寄宿舎で窓ガラスをふきながら、目の前に見える風景を詩にしたものである。日曜日の朝のさわやかでのびのびした気分が躍動的にうたわれている。

やがて青島日本中学校を卒業した黄瀛は、日本での勉学と活躍の場を求めて1925（大正14）年再び来日、早速月船の主宰する詩誌「朝」（のち「汎濫」と改題）の同人となる。その年の同誌10月号には黄瀛の「七月の情熱」と題する詩が掲載される。

七月の情熱

白いパラソルのかげから	あゝ、私はコールテンのズボンをならし乍ら
私は美しい神戸のアヒノコを見た	その美しい楚々たる姿に
すっきりした姿で	パナマハットの風を追はうとした
何だか露にぬれた百合の花のやうに	彼女の白いパラソルの影で
涙ぐましい処女を見た	その美しい眼と唇に
父が—	聖い接吻を与えようと
母が—	ふと途上のプラタナスの下で
その中に生まれた美しいアヒノコの娘	七月の情熱を高めてしまった
そのアヒノコの美しさがかなしかつた	

青島から船で神戸に着いたときの光景をうたったものである。「そのアヒノコの美しさがかなしかつた」とよんでいるが、それは黄瀛自身のかなしさでもあつただろう。

再来日した黄瀛はお茶の水にあった文化学院（1年ほどで中退）を経て、官費留学生として陸軍士官学校に学び、1929（昭和4）年恩賜の軍刀を拝領して卒業、中野の電信隊に配属され、軍用伝書鳩の研究業務に従事する。こうした間にも宮沢賢治、草野心平、木山捷平らと親交を深めながら意欲的な詩作活動を続け、1930（昭和5）年には第一詩集『景星』を出版する。翌31（昭和6）年帰国し南京で軍務につくが、日本滞在中の6年間、月船は黄瀛の真の理解者であり庇護者であり、また詩人としての師でもあった。

帰国後の黄瀛は国民政府軍の要職につき、陸軍特別高級参謀（少将）にまで昇進する。戦後は日本軍の接収業務と日本人の帰還業務に携わるが、中国で敗戦を迎えた邦人が他の外地よりスムーズに帰国できたのは黄瀛の力がずかって大きかったといわれている。女優李香蘭（山口淑子）が漢奸とみなされ、日僑管理处から帰国許可が出ず困っていた際も、黄瀛の厚意的な口添えがあったからこそ帰国が果たせたという。

その後、国共内戦などのあおりを受け、新中国成立時（1949年）と文化大革命時（1966年）の2度にわたって逮捕投獄される。出獄後は名誉を回復して重慶に住み、四川外国語

学院教授（日本語学部長）として「日本近代文学選講読」「日本詩歌」「日本文学史」などを担当。また四川省政協委員、重慶市人民代表などの要職にも就任して活躍する。日中平和友好条約締結（1978年）後、日本の文化諸団体の招きなどで数回来日、最近では2000（平成12）年7月19日に来日している。

戦中戦後における月船と黄瀛との交流は不明である。ただ、黄瀛の第2詩集『瑞枝』（1934年刊）が1984（昭和59）年、蒼土舎から復刻されたとき、月船は次のような祝辞を寄せており、その親密ぶりをうかがうことができる。

黄瀛さんの消息をついぞ久しく聞かなかった。私は昭和10年に東京の家（筆者注＝武蔵野市井之頭2丁目24-5）はそのままにして、岡山県もずっと山奥の寺（筆者注＝川上村観音寺）に飯住し、山の村のこと（筆者注＝同村助役、のち村長）を何かとやっていたし、黄さんは山口高商の試験はパスしたものの与謝野寛夫妻によって創設された文化学院に入学、中途から、陸軍士官学校に転じ、それから中国に帰り、軍務に従ったのだと思う。だから出会うという機会が、その後ついぞ無かったわけである。（中略）

第一書房から「詩聖」が刊行されていた頃、黄さんは青島の中学校から、作品をせっせと寄せていた。編集は大藤治郎氏、その大藤氏の委嘱によって、橋爪健氏、中野秀人、加えて私の3人が、投稿の作品を見ていた。いい詩を書くではないか、大藤氏と共に3人がいつも口から出る言葉であった。

黄さんは中学をすませた後、東京に来たが、その間受験勉強につとめつつよく私の家を訪ねて呉れた。黄さんの家は中国での名門であり、従って至極控え目な挙措、その慎しみの深いところが、純粹と端正を私に印象づけた。日本語はたしかであったが、いくらか吃る加減あり、それも引き吃りであったようだ。

詩集「瑞枝」は寄贈を受けているので、私の書庫のどこかに確におさまっている筈であるが、東京の家と、山の村の寺と、それに現在のところ（筆者注＝岡山県小田郡矢掛町横谷 洞松寺）と、三つに分れているため、今早速に取出して再読するということが出来にくい。たぶん山の村の寺にあるかと思う。「瑞枝」というタイトルそのものが示しているように、清爽で若々しい作品の一集である。（中略）

「瑞枝」の詩人は健在であるとのこと、又詩集復刻のことも企画にのぼっているとのこと、いい話を聞くではないか¹⁾。

3 郷土の後進木山捷平を育てる。

小田郡新山村山口（現笠岡市山口）出身で、後に芸術選奨文部大臣賞（昭和37年）を受賞した詩人・作家の木山捷平（1904～1968）は、兵庫県出石町で小学校教師をしていた。

しかし文学への渴望を満たすべく、1925（大正14）年教職をなげうって上京、月船の門をたたく。月船は自らが主宰していた同人詩誌「朝」（のち「汜濫」と改題）に迎え入

れるとともに、積極的に活動の場を与えることに意を注いだ。

まず、1926（大正 15）年、捷平の作った詩「飯を食ふ音」「地球よ廻転を止めろ」など 10 数編の中から数編を選び、添削を施して、有力新聞「万朝報」に推薦する。「万朝報」はこの中から「電信工夫」ほか 2 編を同誌に掲載。捷平は詩によってはじめて稿料を得る。

電信工夫 凍るやうな寒風の吹く夕暮れであるのに／見てごらん！／電信工夫
が仕事をしている。／手がかじかんで／まつさかさまに落ちはしないだろうか
／電信柱のてつぺんにだけ照っている／水のやうな夕日の淡さー

庶民の生活に視点をおき、懸命に生きる一労働者の姿を鮮やかな背景描写を織り込みながら、いきいきとよみあげた点が評価されたといえよう。特に最終句「水のやうな夕日の淡さー」に、「研ぎすました清楚な言葉によって、結びで胡椒をきかせ、柔軟な象徴にみずから止めを刺す²⁾。」という、師月船の詩風が表出されている点に注目したい。

さらに月船は、月船主宰の同人誌「汎濫」で詩作修行を続ける捷平を抒情詩社（内藤銀策社長）に紹介。同社は『一九二七年詩集』に捷平の詩数編を載録する。内藤銀策は新人の発掘と育成をも視野に入れて抒情詩社を創立したのであるが、それにしても上京後間もない新人詩人の詩の同詩集への載録は、破格の厚遇であったという。この詩集には巻頭に月船の詩が載るほか、安西冬衛、萩原恭次郎、三好達治、高橋新吉、丸山薫、北川冬彦など、錚々たる詩人の珠玉の作品も収録されていたのである。

こうした月船の尽力によって、捷平は上京後わずか 2 年にして一躍文壇に名を馳せるようになる。当然のことながら自信を得た捷平は一層旺盛な詩作活動を続け、意欲作をあいっついで発表する。そうした折しも月船は捷平に詩集の出版を勧め、出版社を紹介するとともに坂本遼、小野整らと相携えて自らも序文を書く。

かくして捷平は 1929（昭和 4）年 5 月、月船らの序文を得て、初の詩集『野』を抒情詩社から出版。名実ともに詩人としての地歩を確立するのである。時に月船 32 歳、捷平 25 歳であった。

『野』に寄せた月船の序文は、純朴で閑静であった捷平の故郷の風物——特に麦の緑にふちどられ、丘全体が豊旗雲のように咲き乱れる桃畑の景観と山腹にたたずむ寺院の白壁の美しさをたたえる。そうして、こうした風物も農村の疲弊とともに失われつつある現実を嘆き、「僕たちが僕たちの故郷をとり返すのは一体いつの日のことだろう³⁾」と結んでいる。

月船の厚情に対し、捷平はその跋文で次のように述べている。「序文を頂いた赤船月船、坂本遼、小野整の三氏にありがたうを述べたい。赤松氏を知って足掛五年になるが、その間、氏は私にとっての物を教へぬ師であった。その雨あがりのすがすがしい風色と、そして霜と椿！（以下略⁴⁾」

この文章中の「物を教へぬ師」とは、詩に対する姿勢、詩人としての生き方、さらには広く人生の師表として、薫陶を受けたことを意味している。「雨あがりのすがすがしい風色」

とは、月船の清純でさわやかな人柄をたとえたものである。

また「霜」とは霜のような凜とした清冽さであり、「椿」とは椿の花のような清楚な美しさの謂であろう。そうした師匠月船の人柄や生きざま、詩や文学に取り組む姿、さらには月船独自の詩的世界に導かれながら精進を続け、詩人として成長してきたことに捷平は深い感謝の意を表しているのである。なお、月船は捷平の第2詩集『メクラとチンパ』の刊行（1931年、天平書院）に際しても尽力している。

このように、捷平を一人前の詩人として育て上げ、世に送り出したのはまさしく赤松月船その人であったのである。

ついでながら、月船が主宰した同人詩誌「朝」（のち「氾濫」と改題）は、新鋭詩人たちの出会いの場でもあった。1925（大正14）年、機を同じくして参加した中国の俊秀黄瀛と捷平、それに草野心平は意気投合し、以後3人は国境を越え、生涯の友として親交を続けていくのである。

木山捷平は後年作家としての道も歩むようになるが、これに際しても月船は重要な指導者的役割を果たしている。

捷平は1932（昭和7）年、かつて教鞭をとったことのある兵庫県出石町の弘道尋常高等小学校を訪れる。出石を去って以来7年ぶりの訪問であるが、ここで旧知や教え子たちの温かい歓迎を受ける。同年8月10日の日記にはその歓待ぶりを詳細につづり、「うれしき町なり。なつかしき町の人情なり。」と述懐、この地への深い感慨にひたるのである。こうしてよみがえった第2の故郷ともいえるべき出石の町への郷愁と懐旧の情が、小説執筆の大きな動機となる。帰郷した捷平は早速小説「出石城崎」として書き上げ、月船に批正を仰ぐとともに出版先も模索する。以下、捷平の日記を通して処女作「出石」誕生までの経緯を月船とのかかわりを中心に明らかにしてみたい。

昭和7年11月4日、金。赤松月船訪問。小説の原稿を見て貰う。『出石城崎』。改造社へ原稿を持って行き、まだ受け取るというのでなおそうと思い持ち帰る。

昭和7年11月10日、木。赤松月船氏訪問。不在。昨夜書き上げた原稿107枚を見てもらうつもりで行ったが。……

昭和8年1月27日、金。寒さきびし。朝起きたばかりの所へ、那須、今野両君来る。（中略）3時ごろ昼食。両君をおっかけて塩月君神戸君宅へ行く。去りし後、神戸君「海豹」という雑誌をやるという。小生は同人費がなからうから入会（筆者注＝入会勧誘）を遠慮していたという。……

この日記に登場する「神戸君」とは、元宝文館編集長の神戸雄一のことである。このように、捷平は1933（昭和8）年1月27日、友人の神戸雄一から創刊予定の同人誌「海豹」への参加をもちかけられる。そこで前年の暮れ執筆し、改造社から出そうと同社と交渉していた「出石城崎」を「海豹」に載せることを思い立つ。捷平にとってはまさに「渡りに舟」の好機であったのである。ところがこの「海豹」は短編を要求したため、捷平は前記

「出石城崎」(107枚)を圧縮する必要に迫られ、「出石城崎」から「城崎」の部分を削除、「出石」として出品すべく改作にとりかかる。(同年2月2日付日記)。2日後改作を完了した捷平は、月船宅に持参して最終批正を仰ぐ。

昭和8年2月4日、土、立春晴。朝赤松月船訪問。『出石』書き改めたものを見もらう。これにて短編になりし由。(中略)夜、海豹同人会。古谷綱武宅。会費5円。集まるもの——大鹿卓、今官一、岩波幸之進、塩月赴、新庄嘉章、吉村〇〇〇、神戸雄一、藤原定、小池〇〇、太宰治、小生。

昭和8年3月2日、木、曇。……朝食を1時ごろしていたら今野が来た。「海豹」にのった『出石』をほめてくれる。連れ立って塩月君訪問。同君『出石』を巻中第一とほめてくれるうれしい。弄花2年あまり。夕方かえる。朝の郵便で太宰から6銭の手紙着いた。『出石』の批評がのっていて随分手きびしくやつつけてある。——彼は小生をまだ子供のように思っているらしい。しかし批評の態度はうれしい。……

こうして捷平の処女作「出石」は、月船の助言のもと好評裡に誕生、捷平は作家としての第一歩を踏み出すのである。第二作「うけとり」についても月船は助言を与えるとともに、その出来ばえについて、「佳作。セイと岩助の情景はきれいななり。」(同年5月6日付、捷平日記)と賛辞を送っている。

このように、捷平は小説家としてのデビューを果たすに当たって、月船の指導を仰ぎ、月船もまた懇切な指導助言を施しているのである。月船はやがて(1936年)、岡山県平川村観音寺に帰住、捷平の東京での文学の師は井伏鱒二となる。しかし、月船は晩年、山陽新聞夕刊文化欄「歳月の記」で、「……彼(筆者注＝木山捷平)の短編集「耳学問」(昭和32年刊)のうちの数編は、私が先に読んで意見をやったものです。……⁵⁾。」と述懐しているように、捷平の生涯にわたっての支援者であったといつてよいであろう。

4 太宰治「道化の華」への影響

すでに述べたように、木山捷平は1925(大正14)年上京し、月船門下で詩作に精励していたが、1933(昭和8)年、文士仲間の神戸雄一(元宝文館編集長)から同人雑誌「海豹」創刊に際して参加話をもちかけられ同意する。一方、神戸は東京帝国大学学生で、「思ひ出」を執筆中の太宰治(1909～1948)にも参加を促す。

この同人発足会が同年2月4日夜、東中野の古谷綱武邸で開かれたとき、大鹿卓、新庄嘉章、今官一ら先輩文士に交って木山捷平と太宰治が出席。これが両者の初対面の場となる。17日後の2月21日夜、同誌創刊号掲載作品の校正会が古谷邸で行われたが、この時木山は処女作「出石」、太宰は「魚服記」を校正する。その時の様子を木山は次のように述べている。

創刊号の校正が出たという知らせで行ったのだが、太宰が一足先に来ていて、しかしまだ校正にかかる前であった。ところがいざ校正の段になって、太宰の原稿を

見ると、太宰は原稿を毛筆で書いているのである。赤系統のケイのある半ペラの原稿用紙に、習字の清書でもしたかのように、一字一画といえどもおろそかにしない力のこもった筆蹟で書いているのである。僕はその、何度か書き直したであろう精神ぶりに圧倒された。

なぜなら、僕の原稿など、ほんの間に合わせのものだったのだから。(中略)僕の校正はすぐに終わった。それで古谷とヘボ将棋をさすことになったが、将棋をさしながら、ふと思いついて、僕は太宰に声をかけた。

「太宰君、その君の原稿ね、校正がすんだら僕に進呈しないか」

「何にするんだい」

「将来、君がえらくなった時、家宝にしたいんだ。ことによったら、売りに出してもいい」

「ふん、尻ふきにもなるまい。だけど、僕はもう、いらない」

太宰は校正の筆をつづけた。(後略)⁶⁾

かくして木山と太宰は急速に接近し、互いに畏友として親交を深めていく。やがて木山は師赤松月船に太宰を紹介する。住居も近かった太宰はしばしば月船宅を訪れては文学談義に花を咲かせるようになる。太宰の大器逸材ぶりを見抜き、将来を期するところ熱いものを感じた月船は、自らの師生田長江の翻訳、ニーチェの「ツァラトウストラ」やジッダの「ドストエフスキ論」などを太宰に読むべく勧める。太宰は月船から借りうけた「ドストエフスキ論」を読んで開眼し、名作「道化の華」を書き上げるのである。

「道化の華」は、太宰が自らの心中事件(昭和5年、銀座のバーの女給田辺あつみと鎌倉の海で投身、女だけが死ぬ)を題材として書き終えていた「海」を全面的に改作したものである。それは、心中に失敗した大庭葉蔵と見舞に來た青年たちとの道化ぶりを斬新な構成と新鮮な筆致で描いたもので、まさに一大傑作といってよい。

この「道化の華」は、やはり木山の勧めで、1935(昭10)年5月1日発行の同人雑誌「日本浪漫派」の第1巻第3号に発表され、同年8月、「逆行」とともに第1回芥川賞の有力候補となる。しかし、惜しむらくは太宰の生活の乱れが指摘され、それが致命傷となって次席に終わるのである。

前述のように「道化の華」は作者自身の心中体験を題材にしているが、主人公(大庭葉蔵)のほかに作者自身である「僕」が登場し、作品や作中人物に対する所見や批判を述べるという二元的手法によって自己の罪の意識を探究する前衛的な作品である。こうした前衛的な名作を生み出させた原動力は、月船の勧めた「ドストエフスキ論」であり、太宰文学の成長に果たした月船の役割はきわめて大きいといえるであろう。

ちなみに、太宰は「川端康成へ」(『文藝通信』昭和10年10月号)で次のように述べている。(圏点は筆者)

「道化の華」は、3年前、私、24歳の夏に書いたものである。「海」といふ題であ

つた。友人の今官一、伊馬鶴平に読んでもらったが、それは、現在のものにくらべて、たいへん素材な形式で、作中の「僕」といふ男の独白などは全くなかったのである。物語だけをきちんとまとめあげたものであつた。そのとしの秋、ジツドのドストエフスキイ論を御近所の赤松月船氏より借りて読んで考へさせられ、私はその原始的な端正でさへあつた「海」といふ作品をずたずたに切りきざんで、「僕」といふ男の顔を作中の随所に出没させ、日本にまだない小説だと友人間に威張つてまはつた。友人の中村地平、久保隆一郎、それから御近所の井伏さんにも読んでもらつて、評判がよい。元氣を得て、さらに手を入れ、消し去り書き加へ、5回ほど清書し直して、それから大事に押入れの中にしまつて置いた⁷⁾。

5 郷土ゆかりの作家藤原審爾を育てる。

1918（大正7）年5月僧籍を離れて上京、文学活動に専念していた月船は、1936（昭和11）年2月岡山県川上郡平川村（現高梁市備中町）の観音寺住職として仏門に復歸する。翌年からは村民から囑望されて同村助役、続いて村長にも就任、同村森林組合長、産業組合長等の役職、在郷軍人会、大政翼賛会等の責任者も兼務、文字通り八面六臂の活躍をする。こうした多忙な生活のなか、詩作・童話の執筆などの文学活動が続けるかたわら、後進——藤原審爾（1921～84・直木賞作家）を育てるべく奔走した。

藤原は東京に生まれたが、幼少時代から閑谷中学校（現和気閑谷高校）を卒業するまで、父の郷里岡山県和気郡東片上（現備前市）で祖母に養育される。岡山はいわば郷里に等しい地である。1933（昭和8）年上京し、青山学院中退後作家生活に入るが、第2次大戦末期に岡山市に疎開。終戦をはさんで数年間、地方文芸誌「曙」「文学祭」などを出しながら作家修行に精励する。

その藤原が無名の作家として苦闘していたころのことである。観音寺住職をしていた月船は、藤原より4歳年上で、後に岡山大学特設美術科の教授となる彫刻家宮本隆に引き合わせる。藤原の創作活動にエネルギーを注入しようとしたのである。

宮本も戦後の混乱期、東京から岡山県成羽町（現高梁市成羽町）に帰郷。物資不足でアトリエもなく仕事もなく苦勞していた。そうしたなか、同町下原の本光寺本堂で日展出品用の聖観音像を彫っていた。それを知った月船は、岡山から藤原を呼び寄せて本光寺へ連れて行き、彫刻現場を見せたのである。

當時を回想して宮本は、「藤原さんは、かすりの着物にはかま姿。昔ながらの文学青年といった趣でしたな。無口な人で、仏像の彫り方を聞かれたくらい。僕もしゃべる方じゃないから、会話といえぱそれくらいでした⁸⁾。」と述懐している。

しかし、そうしたわずかな対面が、創作に難渋し呻吟していた藤原に開眼の契機を与え、かつ創作への意欲をかきたてた。藤原を育てようとする月船の温情は見事に実を結んだのである。宮本と言葉を交わし、彫刻現場を見た藤原は、渾身の力をふりしぼって執筆に取

り組む。元吉備路文学館館長山本遺太郎によると、「蚊遣が尽きて体じゅうを蚊にさされながら、新しい蚊遣に火をつける時間も惜しんで朝まで書く、そんな日々がつづいた。眠気におそわれた時も、今この時間に日本中で何百人の文学青年が原稿用紙に向かっているかと思い、彼らの3倍はやるぞと奮いたって坐り直す⁹⁾。」のであった。

こうして書き上げたのか小説「秋津温泉」である。藤原はこれを1947（昭和22）年12月、『人間』別冊第一号に発表。これが彼の出世作となる。この作品の主たる舞台は奥津温泉（岡山県奥津町）である。作品の冒頭部分に、旅館の宿泊客として登場する「禅寺の仏像を刻んでいる40過ぎの仏師」は、明らかに月船が対面させた宮本隆をモデルにしている。また、名場面とされる冒頭部の情景描写「瀬音にまじり、さっ、さっ^{のみ}と仏師の鑿の音が、寝静まり、湯の香のこめた別館へ流れわたる。——」も、宮本の彫刻場面から得たひらめきのなせるわざであろう。「非常に無口だが、湯室で童謡をのどかなどら声で口ずさむ。——」という作中の仏師の人物像も、宮本の風貌からヒントを得ていることは疑うべくもない。

とまれ、月船は名作「秋津温泉」を生み出す陰の力となり、作家藤原審爾を世に送り出す大きな原動力となったのである。

ついでながら、月船に藤原を引き合わせてもらった宮本も、後年、「成羽町での生活は思いもよらぬ出会いを生みました。ありがたい仏縁というほかありません¹⁰⁾。」と月船に感謝の意を表している。藤原との出会いによって制作にも一段と拍車がかかり、会心の作品を完成させることができたからである。

月船は草深い平川村に在住していた時代にも、このように後進の育成に力を注いだのである。

引用及び参考文献

- 1) 内田克洋『詩人黄瀛—詩集瑞枝復刻記念別冊』蒼土舎、1984年、16～17頁
- 2) 赤松月船『赤松月船全詩集』永田書房、1983年、429頁
- 3) 木山みさを編『木山捷平全詩集』三茶書房、1987年、13頁
- 4) 同 92頁
- 5) 山陽新聞1969年6月30日付夕刊4頁
- 6) 木山捷平『わが半生記』永田書房、1969年、137頁
- 7) 太宰治『太宰治全集第一巻』筑摩書房、1981年「解題」459頁
- 8) 10) 山陽新聞2000年7月4日付文化欄
- 9) 山本遺太郎『岡山文学アルバム』日本文教出版、1985年、129頁

木山捷平『酔いざめ日記』講談社、1975年

定金恒次『木山捷平の世界』日本文教出版、1992年

佐藤竜一『黄瀛—その詩と数奇な生涯』日本地域社会研究所、1994年

定金恒次『慧僧詩人 赤松月船』西日本法規出版、2004年

Fostering of the Younger Generation by Gessen Akamatsu —Gessen Akamatsu Fostered Koei, Shohei Kiyama, Osamu Dazai, Shinji Fujiwara—

Tsuneji SADAKANE

Courses in Japanese Studies for Students from Overseas

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 4, 2006)

Gessen Akamatsu (1987.3.22~1997.8.5), born in Kamogata Village, Asaguchi Country (now Kamogata Town, Asakuchi City), Okayama Prefecture, is known as a high priest and a poet.

He, during his long life for one century, took an active part in various fields as a priest, a writer of children's stories, a poet, a calligrapher, an administrative officer (a village headman, chairman of a board of education), and so on. In addition, he rendered remarkable services toward the expansion of his sect (soto sect), the rise of the Japanese poetry world, and the development of local administration and local culture.

The purpose of this paper is to clarify his way of fostering the younger writers, which has not been studied at all so far, by focusing how he directed and educated the great men of letters especially Koei (a Chinese Poet), Shohei Kiyama, Osamu Dazai, Shinji Fujiwara.